



Title	周易
Author(s)	本田, 濟
Citation	懷德. 1960, 31, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90348
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

周易

本田濟

易は中國の經書の一つであります。易、詩、書、禮、春秋、この五つが五經といいまして、儒教の最も中心になる神聖な書物とされております。經という字は織物のたていとのことであります。それからすじみち、人のふむべき道という意味になるのであります。で、易は、五經の中でも最もむづかしい、宇宙と人とを一貫した道を示すものと、いうことになつております。

經書は聖人によつて作られたものだといつて、よけいに權威をもつわけですが、易もやはり昔の聖人によつて作られたといわれております。易という書物は、本文と、その解説の部分——十翼——とから成つてゐます。本文は☰とか☷とか☰☱とか☷☱とかの形、いわゆる六十四卦と、それに附けられた文句とから成つております。この六十四卦は實は三本づつのものを上下に重ねてできたものでして、三本づつのは、☰乾、☷坤、☳震、☴巽、☵坎、☲離☲艮、☱兌であります。ふつう八卦とよぶのがこれであります。この八卦を作つたのが太古の聖人伏羲、これを重ねて六十四卦にしたのが神農(伏羲とも禹とも文王ともいふ)、文句をつけたのが周の文王(周公ともいふ)、解説部分の十翼を作つたのが孔子といふので、かように代々の聖人の手をへており、しかも内容がいかにも玄妙で不可思

議である、また未來をも知りうる、こういう點で、易は五經の中でも第一に尊いものとされておるのであります。

しかし右のようなことは古來の儒者の言い傳えでありまして、今日そのまま受け取ることはできません。伏羲とか神農とかいう聖人は神話中の人物で實在ではありません。周の文王が文句を作つたと申しますが、この文句も一時一人の手でできたとは思われません。孔子が十翼を作つたとも疑わしい。大體孔子の時代（西暦紀元前六一五世紀）に易がすでにあつたにしましても、孔子がこれを好んで讀んだかどうか。孔子の言行を記した論語の中で、はつきり易のことに觸れたのは一箇所だけであります。

加我數年、五十以學易、可以無大過矣

「我に數年を加え、五十以て易を學べば、以て大過なかるべし」天が私を長生きさせてくれて、五十から易を勉強したら、大きな過ちを犯さぬようになるだろう。この文章がもとになつて、史記にも、孔子が晩年易を愛讀して書物のとじ糸が三べんすり切れた、といふような話が述べられ、十翼の作者とされるのであります。

しかし右の文章は、實は必らずしも孔子が易を好んだ證據にはならない。と申しますのは、右の文中の「易」の字を、魯の國の儒者は「亦」に讀む。つまり「亦」の假借と見るのであります。すると右の文は、

加我數年、五十以學、亦可以無大過矣

「……五十以て學べば、また以て大過なかるべし」長生きできて五十の手習いをしたら、私のようなものでも、大過がなくなろう、といふ意味になりまして、こちらの読み方のほうがどうやら本當ではないかと思われます。ともかく論語の右の文章が、孔子が易を愛讀した證據にはならない。

それに思想的にも孔子の考え方は易と必らずしも相い容れないところがあります。孔子は倫理道德の根源を、神から人間に移した點で大きな意味をもつてゐます。古代では善し惡しは神の目から見ての善し惡しで、どうすべきかの道徳的な判断も、神意をうかがつて決定されていました。ですから殷代（西暦前十八一十二世紀）には占いが全盛で、

巫が總理大臣にまでなつています。これは西周時代（前十二一八世紀）に入つてもある傾向でした。それが春秋時代（前八一五世紀）になつて、神に對する信仰が前ほどでなくなり、人間の比重が高くなつて、孔子のような考え方になるわけであります。孔子は神に對して尊敬は拂つておりますが、一應人間の生活から切り離して、そつとして置くことにしました。「鬼神を敬してこれを遠ざく」といつてある通りであります。いかにすべきかの決定は、ですから、人間自身の良心によつてされねばならない。そして行爲の善し悪しは、結果でなくて、動機によつてきまると考えたようであります。「苟くも仁に志せば惡なし」と申しておりますのはそれで、動機が道にかなつておれば、結果はどうでも、その行爲は惡くない」ということであります。

ところで易はもともと占筮の書物であります。占筮は一種の神意をうかがう手段でありますて、こういうたちの技術はすでに春秋時代の賢人たちが疑いを抱いているものであります。それに占いで、とるべき行動をきめることは、孔子の動機主義とは矛盾します。こういう點で孔子が易を好んだといふことはまず有りそうにない。ところで、一方、孔子は「天命を知る」ということを君子の條件にしておりまして、これからすると易のよくな未來を知る技術を受け容れそうにも見えましようが、孔子の「命を知る」ということは、一種の悟りの境地、人事を盡したあとは笑つて運命を甘受するという態度を述べたものでして、占いによる未來予知とはかかわりがない。こういうふうで易を孔子と結びつける確かな證據はないわけです。それに孔子に續く孟子（前五一四世紀）にしましても一言も易について言及しておらず、易がもともと儒教の經典であつたとは考えられません。

しかば易は本來何であつたかと申しますと、單なる占筮のテキストだつたとしか考えられない。易經の本文の文句は、それ自體では別に深い哲學などを含まない、占いの判斷のことばでして、それも一時にできたものでなしに、古いト辞の残りやおみくじの文句、それに諺のようなものを加えてできたもので、西周から東周にかけて（前十二一三世紀）のいつの間にかできて來たのであります。周易の名稱にしましても、後には深い意味を含ませるよう

なりましたが、もとは、周は國名の周、易は蠍蠍の象形文字で、おそらく占い者の同業組合が附けておつた標識、看板がとかけであつて、そこから彼らの使用するテキストの名稱にもなつたのだろうと想像されます。ところで易が本來そのようなものなら、それがどうして儒教の經典になつたかが問題であります。一言で申せば、儒教のほうが變つて來たからである。初期の儒家は政治とか倫理とか人間の身近かなことだけに力を注いでいました。それが戰國時代（前五世紀—三世紀）も末になつて、いろいろの學派の競争が激しくなると、それだけでは事が足らない。宇宙の構造とか、萬物の奥にある本體とか、天と人とを一貫する道とかの哲學的な問題が、新たに人々の關心事になつて來ておる。そういう時ですから、儒家の方でも何とか陣容を強化しなければ時代に取り残される。そこで古い占いの書物である易に、種々の哲學的な理論をくつづけて、新しく經典の列に加えたのであります。十翼というのは、このために作られたもので、これも決して一時に出來たものではない。中でも最も重要なのは繫辭傳で、これによつてこそ、易は經典とされるだけの哲學性を獲得したと申して過言ではないでしよう。易が經典になつたのは大體秦（前三世紀）から漢（前二世紀—後一世紀）の初めにかけてであります。

以上、易經が聖人の作でもなんでもない、素朴な占いの書物であつたことを申しましたが、もとが何であつたにしましても、出來上つたものの價値にはかかわりはない。以後二千年にわたる中國の思想の中に、易が大きな重さを占めたことは嚴然たる事實だからであります。

II

以下に、十翼を含めての易の考え方がどのようなものであるかを簡単に述べて見ます。

易の卦は一と一とで出來ています。爻といいます。一は陽の爻、一は陰の爻であります。この陰陽というのは中國の思想の中でも重要な觀念として、萬物を作る二種の元素であります。これは氣ともよばますが、氣は氣體として、

これが凝縮して液體にもなる。また氣は呼吸の意味でもあつて、生命源もある。陰陽はこういう氣の二種で、無限に流動し、からみ合い、變化して、森羅萬象を形づくつているのであります。繫辭傳では陰と陽の二元のまつたものになる原理を考えておりまして、これを太極とよんであります。これは全く見えず聞えぬ本體、老子の無といふようなものであります。とにかく易では、宇宙を陰陽の無限の流動變化でもつて解釋する。世界を變化しつあるものと見るのであります。

しかし變化するなかに、變化しないものがある。世界は變動してやまないけれどもその變りかたには目的に副つた變らぬ法則性がある、といふのであります。これは太陽や月星の動きの法則性から思つてのこととしよう。そして人事もすべて天の運行と平行するところが易の考え方であります。こういうふうに宇宙を變るものと見、變る中に變らないものがあるとして、その變らぬものをどうしてつかむか。それはことばや倫理ではつかめない。象徴と數とではじめてとらえられるのであります。

易は象徴であります。八卦の形はすべてのものを象徴しうる。 は父、天、馬……、 は母、地、牛……、 は長男、雷、龍……、 は長女、風、鳥……とこうふうに。この八卦を組み合わせた六十四卦はさらに複雑な事柄を象徴する。卦につけられた文句もすべて象徴的に解せられる。たとえば は戰爭の卦であり、 は歸妹は結婚の卦であります。卦が立つとは限らない、 は卦が立つかも知れない。逆に戰争のことを占つた場合、 は形が出るかも知れません。そうした場合は、それぞれの卦の戰争や結婚のことを述べた文句は、漠然とした象徴として受け取るほかはないのであります。

易はまた數であります。一は九、一は六とよばれます。卦を出すための筮竹の操作も神秘的な象徴的な數に關係してある。五十本の筮竹を用いて、そのうち一本は終始除いておく。これは太極にかたどる。四十九本を任意に左右二つに割る。これは天と地に象どる。右手の分から一本を取つて左手の小指にかける。これは人に象どる。それらか

左手右手の分を四本づつ數えてゆくのですが、この四は四季にかたどる。左と右と各々の残數は間にかたどる。この残數と左小指にかけた一本との總和は必ず九か五。これを除いた四十四本或いは四十本で同様の操作をすると残數は八か四。もう一度同様にして得る残數も八か四。これで残數がたとえば九、八、四なら一、五、四、八なら一といふように、求める卦の最初（一番下）の爻が得られ、これを六回くりかえしてはじめて卦が立つのあります。このような筮の操作の數理だけでなく、易にはいろんな數がつけられています。宇宙のなかの變りつつ變らぬもの、法則性がこのようないくつかの數理でとらえられるといふのは、天體の運行が數で解けることからの聯想でしようが、もう一つには、中國における數といふものが單なる抽象觀念でなくして、神祕的な感じで受け取られているからでもあります。

ともかく易は象徵と數をもつていて、それによつて、宇宙の、また人事の秘密をたやすく解明できる。後漢の鄭玄じょうげんといふ學者は、易の名稱を解釋して、「易は一字で、變易（かわる）、不易（かわらぬ）、簡易（たやすい）の三つの意味を含む」と申しておりますが、これはいかにも中國的な面白い考え方であると思われます。

中國には天地の動きと人間界の現象とが相關係するといふ考え方があり、それは易の十翼にもはいつております。それですから、宇宙の奥にある法則性といふものは、人間界のいろんな事柄についても存在する。つまり人間の運命はいかにも遇然な氣まぐれなよう見えて、天地同様に、そのなかに法則性がある、ということになります。「天下の事何をか思い何をか慮らん。同歸にして殊塗。一致にして百慮。天下の事何をか思い何をか慮らん」天下の事は道はちがつても行きつく所は一つだし、あれこれ考へても結果は同じだから、何をか思いわざらうことはないといふ意味で、まことに樂天的な考えであります。（樂天といふのも易のことばですが。）

孔子らは運命といふものを氣まぐれなもの、どうにもならぬものと考えました。人間善いことをしても必ずしも善い運には遇わないのである。しかし易では「積善の家には必ず餘慶あり」と申して、道徳と運命とは矛盾しないと見る。むしろ、天も人もすべて大きな調和した法則性がその裏にあつて、それに乗つかり隨がうことが道徳だといふふ

うに見てあります。で、そのように人事にも法則性があつて、それが易の象徴や數で簡易にとらえられるから、當然未來のこと、吉凶のきさしも予見できるので、それを見て適當に行動すればよいということになります。これは倫理學說としてはするい結果主義であることは否定できません。

しかしそうることは處世の智慧の一つであります。易は、ですから、處世術のすぐれた教科書でもあります。易の卦の六爻には「位」というものがあり、上ほど高いのであります。 乾の卦は龍がだんだん地中から天に昇つてゆくという象徴的な文句が附けられておる。一番下は「潛める龍、用いるなれ」で、人間なら徳を抱きながら民間に隠れている状態。下から一番目は「見われたる龍田にあり、大人を見るに利あり」ようやく世に出て聖天子に認められる運勢。こうして昇つて行つて五番目が「飛ぶ龍天にあり、大人を見るに利あり」で、非常にめでたい。それなら一番上はどうほど良いかといふと、「亢りたる龍悔あり」でかえつて悪い。つまり出世しすぎて昇りつめると危険なのであります。大體六爻の中で一番良い位は五、二である。一つの卦は上三本（外卦）と下三本（内卦）に分けられます。五の位、二の位はそれぞれのまん中にあたる。つまり中庸を得た位が一番よくて、高過ぎては危いというのでして、易の術語で「中」と申しますが、これなどいかにもおとならしい處世智であります。

また位について「正」ということがある。下から數えて一、三、五の奇數位に陽爻一が、二、四、六の偶數位に陰爻一が来る場合を正、その反対を不正といいます。奇數は陽の數、偶數は陰だから。つまり強い者は強い位に、弱い者は弱い位にあるべきで、弱い者が強い位にあるのはよくないということです。

右の原則でゆくと 未濟の卦は最悪になりそうですが、さほど悪くない。というのが内卦（上半分）と外卦（下半分）のそれぞれの一、二、三が對應している。つまり通算して數えると、一が一なのに對して四は一、二が一なのに對して五が一、三が一なのに對して六が一と、陰陽反対の爻が上下相對している。これでよほど数われるから、六爻すべて不正であるのにあまり悪くない卦になつてゐる。こういう關係を「應」といいます。人事でいえば上位者の

引きなどと「いふやうなことになりましよう。」

このようないふやうな原則は立てられておりますが、その實、これら必らずしもあてはまらない場合が多い。例外が澤山あります。これは易經の成立過程からして無理もないことであります。で繫辭傳では、「典要（原則）をなすべからず、ただ變のゆくところ」といつております。一律な原則のあてはまらないところに易の面白さがあるのであります。漢の揚雄ようゆうと「いふ人が太玄たいげん」といふ易の模作を作りました。これは易とちがつて原則がきちんと立てられてある。この書物を宋の朱子が「これは典要をなすべき書であつて、かえつてつまらない」と評しています。

III

その他いろいろ問題は盡きませんが、概略は右のようなことに止めて、最後に易が中國人のものの考え方一般とのようないふながつていてるか、重複しますが、おおざつぱに見てゆきたい。

第一に易の象徵と數。これは中國人の考え方一般にあることであります。中國には一般に言語や論理への不信があります。繫辭傳に「書は言を盡さず、言は意を盡さず」とありますが、このことばは實によく使われる。言語や論理に信頼をおかないとすれば、直感的な把握というものが重んぜられ、象徵というようなものが克明な描寫、敍述よりも役立つというふうな場合が出て来る。中國の詩はおよそ最も字數を切りつめた簡潔な詩型で、その一字一字は象徵的な働きをしてゐるといえないこともない。いわゆる南畫の描寫には多分に象徵的な筆づかいがあります。數の愛好も一般に見られることで、ものごとを三とか五とかいう神祕數でもつて整理したがる。論客が話をするのに、一つ何々、二つ何々、と數でもつて整理して、説得性を増そうとするなどもそれでしよう。

六爻のうち二、五の中の位を重んずること、これもいろいろの書物に説かれることが共通するところであります。中庸という書物はもつばら物事のよきほど、中庸の徳を説き、老子は満ちれば缺けることを戒めますが、易の考え方も、

これら他の書物の根柢にある中國人一般の生活の智慧から出でております。

さきに中、正、應などの原則が必らずしも一貫せず、しかも易はそれを自認していることを申しましたが、そのような例外を許容する幅のある態度は、中國の思想一般にあるおとなの氣風でありましょう。また例外の許容から一步進んで逆説の愛好といふことが中國にはある。莊子や老子はその典型で、これはユーモアを愛する心から来ております。易にも多分にそういうところがある。䷀ は天が上で地が下の形でよさそな卦ですのに、「否」である。䷁ は天地ひつくりかえつて悪そなに天下泰平の「泰」である。易經の六十四卦の配列順は ䷀ 乾、䷁ 坤にはじまつています。これは最も純粹な形の良い卦ですから當然です。終りの方を見ますと ䷁ 未濟が最後で、䷁ 既濟がその前であります。䷁ 既濟はすべての爻が正で、當然中と應をえており、最も整つた形で、名前も「すでにわたり」、完成の意味がある。これで易經の最後をしめくればよいものを、最も不安定な形の ䷁ 未濟、未完成の卦を終りにおく。なぜかと申しますと、「物は窮むべからず」、物には終りといふものはない、完成ということはない、だから完成の卦のあとを受けるのに未完成の卦でもつて受けた。こうして未完成の卦を易經の最後におくことによつて、易經全體のあらわす世界といふものは、そこで終らずに、さらに無限に生々流轉することが予想されるのであります。これはいかにも逆説的な興味がある。その他、本文にもいろいろユーモアや皮肉がありまして、易の愛される一つの要素をなしてゐるよう思われます。

易の宇宙に變りつつ變らぬ法則性を認める考え方、これも中國人の考え方一般にあるものではないかと思う。たとえば中國では歴史を單なる過去の記録でなく、未來への鑑かがみと見るのが普通ですが、これはやはり世界の現象の中に變りつつ變らぬものを認めてゐる、歴史を繰り返すものと見るからでありまして、易の考え方と共通するところがあろう。

ただ易のような考え方でと、人間は宇宙の、時間の、大きな循環的な動きに乗つかつて因循しておればよい、と

いうことになりまして、いかにも安全な、處世的には賢明な態度ではあります。しかし、時として人間は大勢に叛逆することが必要な場合もありましょう。そうした人間の主體性というものはこの因循といふ道徳からは出て來ないであろう。ここに易のような考え方の限界があるかと思います。

いずれにしても易は、いろいろの意味で、もつとも中國的な考え方を盛りこんだ書物でありますて、經書だからといふだけでなく、各人各様に楽しみを求める書物として、長い間愛讀されたのも、その故であろうと思われるのであります。

(本稿は昭和三十四年五月二十九日、懶徳堂記念講演會における講演の概略である)